

イヌホタルイ発生水田におけるアカスジカスミカメの防除適期

古川農業試験場

1 取り上げた理由

アカスジカスミカメは、宮城県における斑点米の原因となるカメムシ類の主要種である。本種は水田周辺の牧草地等で繁殖し、水稻の出穂期以降に水田へ侵入し加害することから、本種を主体とした防除はカメムシ類の防除は穂揃期とその7日後の2回防除を基本としている（普及に移す技術第59号）。しかし、水田雑草のイヌホタルイが発生した水田では、水稻の出穂期以前に本種成虫が侵入し発生密度が高まるため斑点米被害が増加する（普及に移す技術第81号）。イヌホタルイが発生した水田における防除時期について検討したところ、防除適期が明らかとなったので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) イヌホタルイが発生した水田では、基本とする2回の薬剤散布のうち1回目の散布時期を「出穂始から穂揃期」に早めることで、穂揃期以降の本種の発生密度を低下させ、斑点米の発生を抑制できる（図1、2）。

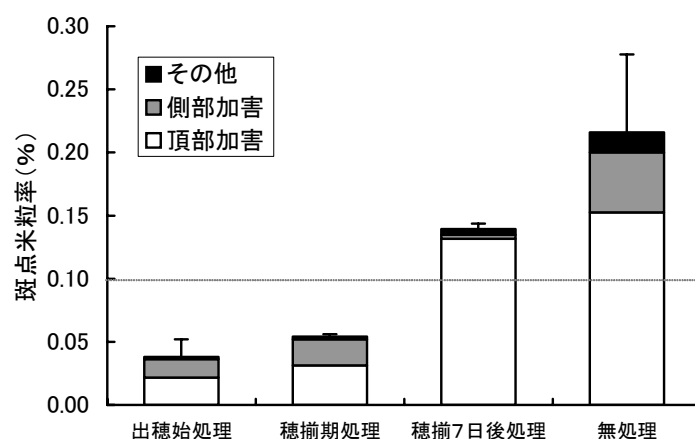


図1 イヌホタルイ発生水田における防除時期と斑点米粒率の関係(平成19年)

注1) 精玄米(1.8mm以上)における斑点米粒率(2反復の平均)

注2) 図中のバーは斑点米粒率合計値の標準誤差を示す。

3 利活用の留意点

- 1) 「穂揃7日後」に行う2回目の薬剤散布は省略しない。
- 2) 薬剤はネオニコチノイド系殺虫剤の散布を想定している。本試験ではジノテフラン液剤の1000倍150L/10aで薬剤散布を実施した。
- 3) 本試験では「出穂始」を「初めて出穂が見られた日」とし、「穂揃期」を「80~90%出穂した日」とし、出穂始から穂揃期までの日数は7日であった。この日数は気象条件等の影響により変動するため、出穂状況を十分に観察した上で薬剤散布時期を決定する。
- 4) 本試験は、イヌホタルイが多発した条件(約400株/m²)で試験を行った(表1)。

(問い合わせ先：古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108)

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究機関

斑点米カメムシ類のIPM技術の現地実証：平成17～19年

2) 参考データ

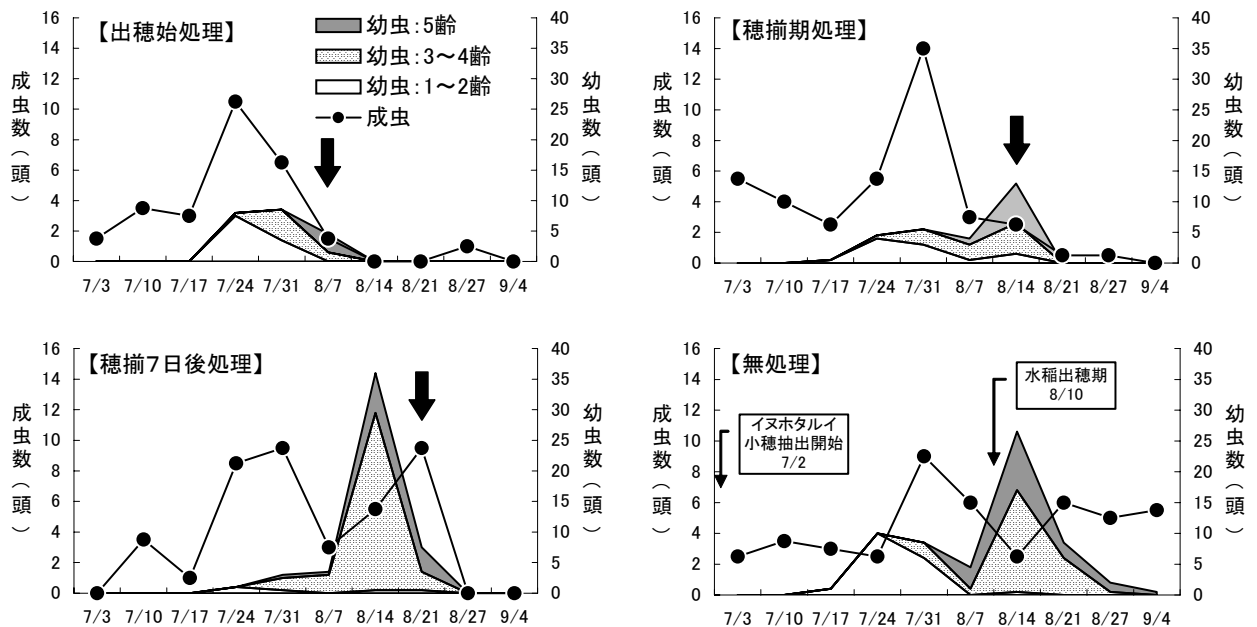


図2 イヌホタルイ発生水田におけるアカスジカスミカメの発生推移(平成19年)

注1) イヌホタルイ小穂抽出開始：7月2日。水稻出穂期：8月10日。薬剤処理時期 出穂始：8/7，穂揃期：8/14，穂揃7日後：8/21。

注2) 成虫数及び幼虫数は10回振りすくい取りによる2反復の平均値を示す。幼虫数は種を判別していないため、カスミカメシ類幼虫数である。

注3) 図中の矢印は薬剤処理(ジノテフラン液剤1000倍，150L/10a)を示す。薬剤処理はすくい取り調査後に行った。

表1 イヌホタルイの発生状況(平成19年)

項目	7/9	7/17	7/24	7/31	8/7	8/15
株数(株/㎡)	278	294	394	367	406	400
花茎数(本/㎡)	2294	2972	3317	3067	3106	3556
うち小穂着生茎数(本/㎡)	467	989	1733	1939	1994	2089
着生率(%)	20	33	52	63	64	59
小穂数(個/㎡)	489	1283	3411	5128	5911	7717
着生茎当たり(個)	1.0	1.3	2.0	2.6	3.0	3.7

※15cm×30cm枠による抜き取り調査，4か所の平均

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

斑点米の原因となるアカスジメクラガメの発生消長及び防除 (第59号参考資料)

イヌホタルイの発生がアカスジカスミカメ被害に及ぼす影響 (第81号参考資料)